



Fuuga

バッハの作曲理論から着想を得た公共空間の設計



外観パース



開架書庫身廊部分



総合学習コーナー

開架書庫

本棚に囲われた落ち着いた場所や本の連なりを眺めることが出来る場所など多様な空間が広がる
身廊部分は同じ方向に椅子を配置することで、みんなが一方を向く。人の目を気にしない静かな場所だからこそ好きな姿勢の読書や何もしないという選択肢を含めた自由に過ごす場所として使うことを想定。

ラボ

3Dプリンターが利用や実験が行われ小学生が夏休みの自由研究に使ったり大人でも実験をすることが出来る化学を通して繋がる&新たな発想を得る場所

水を張った回廊
回廊の開口部に座ってゆったりとした時間を過ごす

ワークスペース

中庭の横で、暖かい日の光が届くワークスペースもあり、健康に過ごすことを目指す

市民活動センター

高齢者のレクリエーション、習い事や趣味、軽い運動など地域住民の小さなコミュニティ形成の場所
活動の様子は、ガラス越しに身廊の部分から垣間見れる

ものづくり工房

帆布やデニムなど倉敷の特産品に直接触れて、体験することの出来る場所

PC・タブレットブース

蔵書を調べるだけでなく、電子書籍で本を読んだり、ゲームをしたりと自由に使うことができる

レクチャールーム

曜日ごとに決まったセミナーを開く内容は健康・福祉、ビジネス、音楽、IT、料理、言語就職活動、子どもと一緒に参加できるプログラムなど多岐に亘る。学び直し機会になったり、興味の種類を撒く場所となったりする

総合学習コーナー

六角形の机がどんな人数にも対応螺旋階段を上ると、外国語学習コーナーにつながる

子どもの図書コーナー

地面に座ることの出来る場所やおはなしスペース、曲線を描く本棚兼椅子、外に直接出られるなど、自由に過ごすことができる

自動書庫

自動書庫を採用し司書さんの作業を効率化その分図書館に訪れた人との交流の時間を増やす

交流・書架コーナー

巨大な円弧状の机は、会話や読書など自由に過ごすことが出来るが、どのように過ごしても円の土で繋がっていることを体感できる。

閲覧・作業コーナー

前後左右に吹き抜けを配し様々な方向に視界の抜けが生まれた開放的な空間

レファレンス・相談コーナー

知りたい内容に見合う本だけでなくおすすめ本の展示、気分に合わせて選書など司書さんや地域の人と本を介して交流できる場所
また、市役所と連携し、市民課の人に常駐してもらうことにより、市役所に行くよりも気軽に子育てや労働、進路などの悩み相談に対応。

外国語学習コーナー

言語学習を気軽に出来る場所
外国人観光客との交流も行い座学だけでなく実践による学びを得ることが出来る

- 1 市民ホール
- 2 控室
- 3 地域資料室
- 4 WC
- 5 文化体験工房
- 6 地産商品ショップ
- 7 市民活動センター
- 8 事務室
- 9 会議
- 10 大会議室
- 11 キッズスペース
- 12 学習室
- 13 カフェ
- 14 ワークスペース
- 15 レクチャールーム
- 16 コーポ

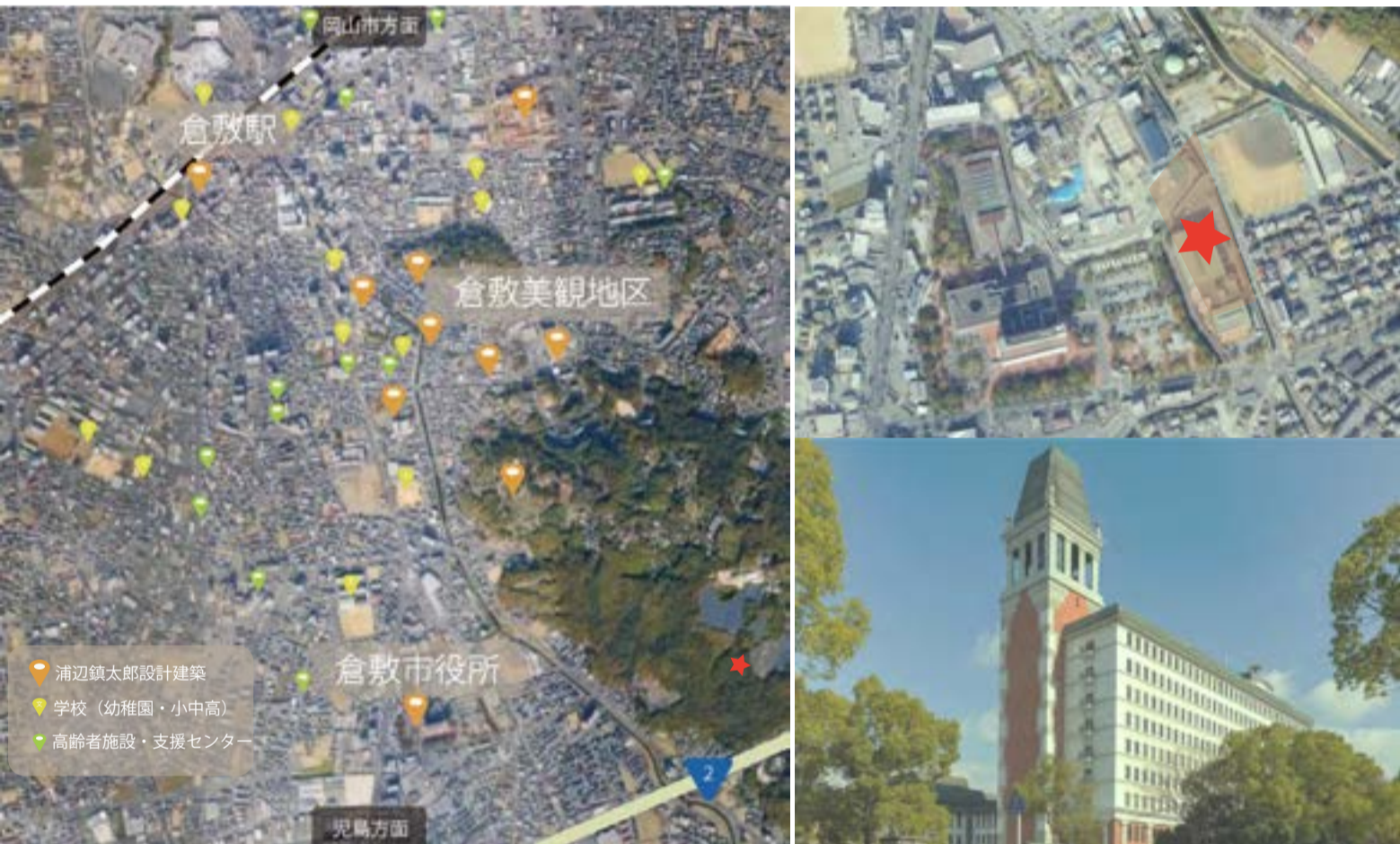


子どもの図書コーナー

URBAN HISUTORY

私の生まれ育った街、岡山県倉敷市は、江戸時代から幕府の綿花や米の集積場である天領として発展し、蔵や商家といった現在の美観地区となる町並みを形成してきた。また、明治時代には元々綿花栽培が盛んであったこともあり、産業革命により紡績産業で栄えた。それを受け昭和時代には、日本初の私立西洋美術館が出来るとともに、倉敷の建築家浦辺鎮太郎により西洋建築を模範にとった建築が建設された。(下図) さらに全国に先駆けて行政と連携し町並み保存活動を行ったことで、倉敷は和と洋を併せた町並みをもつ。

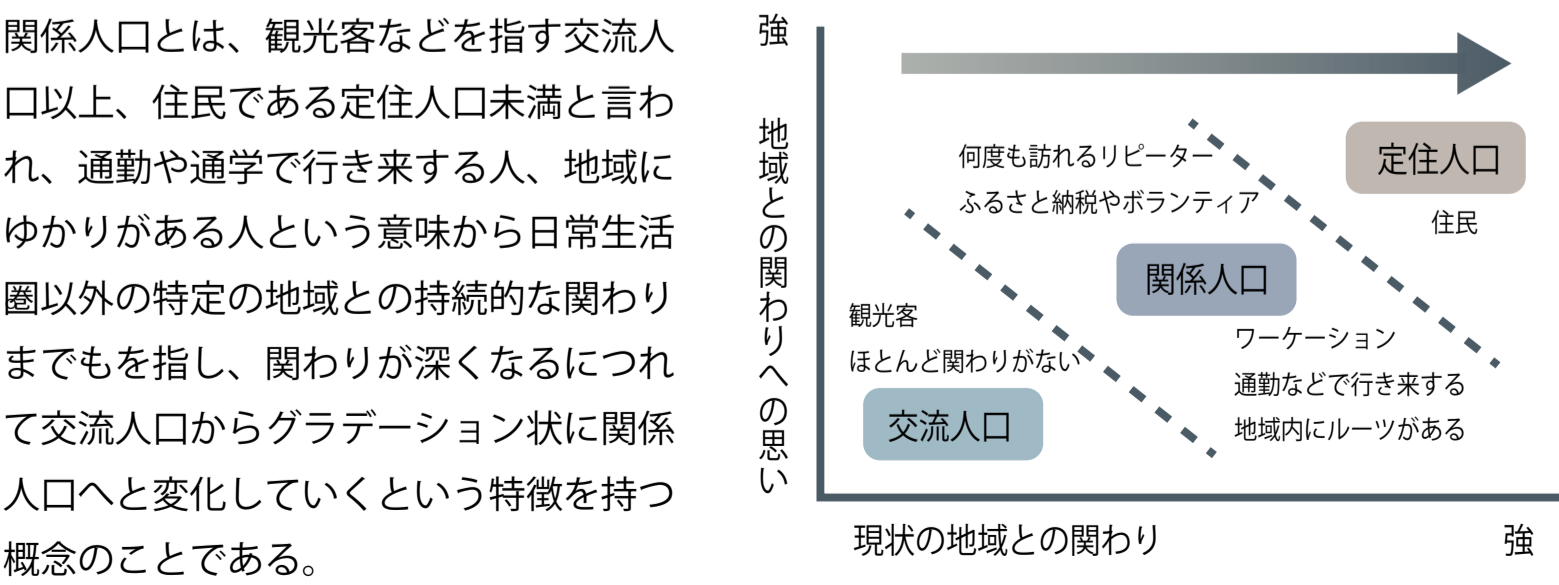
SITE



敷地に選定したのは、倉敷駅から徒歩30分、倉敷美観地区からは徒歩15分の距離にある市営水泳センターがある場所だ。老朽化により無くなるのが決定しているこの敷地に図書館機能を持った公共施設を設計する。周辺には学校や高齢者施設、住宅地が多くあり、市民が集まりやすい場所となっている。隣には、浦辺鎮太郎設計の倉敷市庁舎が建つ。倉敷の町並みを形成する要素の一つである浦辺鎮太郎の建築との関連性について考える。

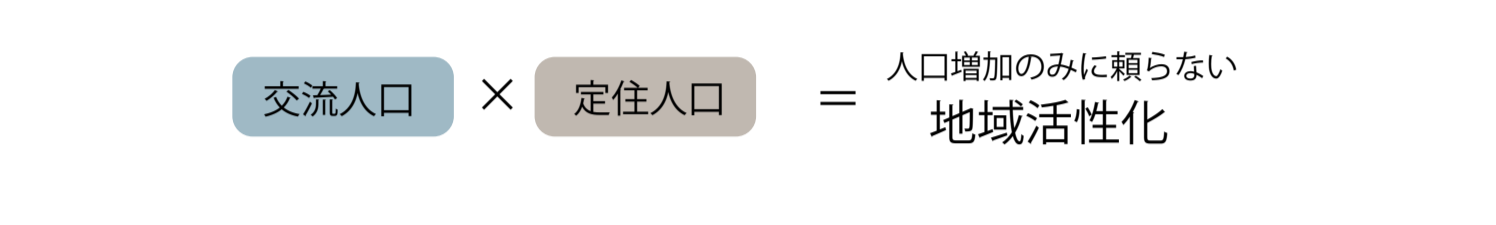
REGIONAL ISSUES

江戸時代から地域と行政で連携しつつ主体的に動くことで、町並みを保ってきたこの地域は、合理的で画一化された地方都市化が進むにつれて地域との関わりが減少し、街の歴史や価値を保つことが難しくなっていくと考えられる。少子高齢化社会にあっても地域を活性化させるためには、街と積極的に関わる関係人口を増加させることが重要である。

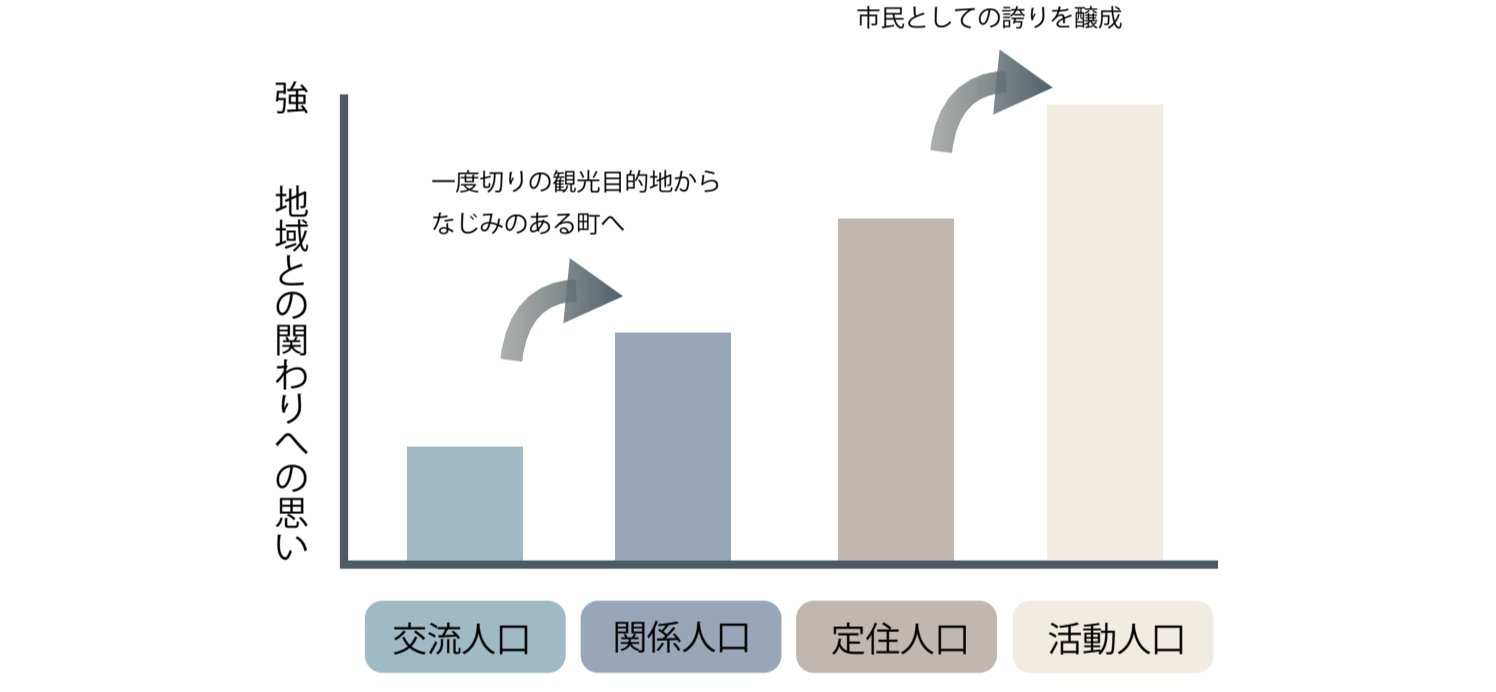


つまり、倉敷市の人口減少が進んだとしてもまちの交流や価値を保ち、増加させていきたいと考える人を増やすことにより、地域の魅力を継いでいく持続可能な社会を形成することが可能だと考えた。

SUGGEST



そこで、観光客と地域住民の関わりをもたらし公共施設設計により、地域の魅力を継いでいく持続可能なコミュニティを形成することを提案する。観光客にとっては、交流を通して人とのつながりや親しみを得ることによって、一度きりの目的地から、これからも関わりたい場所へと変化させ、関係人口を増やす。地域住民にとっては、観光客との交流を通して、改めて街の魅力を体感し、シビックプライドを造成する場所となる。さらに、地域住民同士の交流により、子育て世代、高齢者、学生など様々な立場の人が抱える課題に対して、自分事に捉え、多世代交流により解決していこうという意識を形成し、地域の人と地域のために活動していこうとする活動人口の増加を目指す。



APPLICATION

用途については、倉敷市の公共施設再編計画より、図書館、市民生活センター、高齢者がレクリエーション活動などを行う憩いの家、国際交流情報などを発信する文化交流会館の機能を盛り込む。さらに、再編計画にて指定された機能以外に、人々が集まれる場所として、文化ホール、ものづくり体験施設、カフェ、ラボ、PCスペース、相談スペースを配した。これにより、大小さまざまなコミュニティ形成の居場所を形成する。さらに、継続して市民や観光客を呼び込むきっかけとして、年間を通して倉敷の旬や特産品を取り入れた期間限定のイベントを開催する。

毎週末、身廊の部分で屋内マルシェを開催し、その月の特産品を販売する。地域らしさを自分たちで作り上げることで地域の魅力を再確認するとともに、各地で行われる花見や収穫イベントの誘導へと繋がる。



イベント年間スケジュール

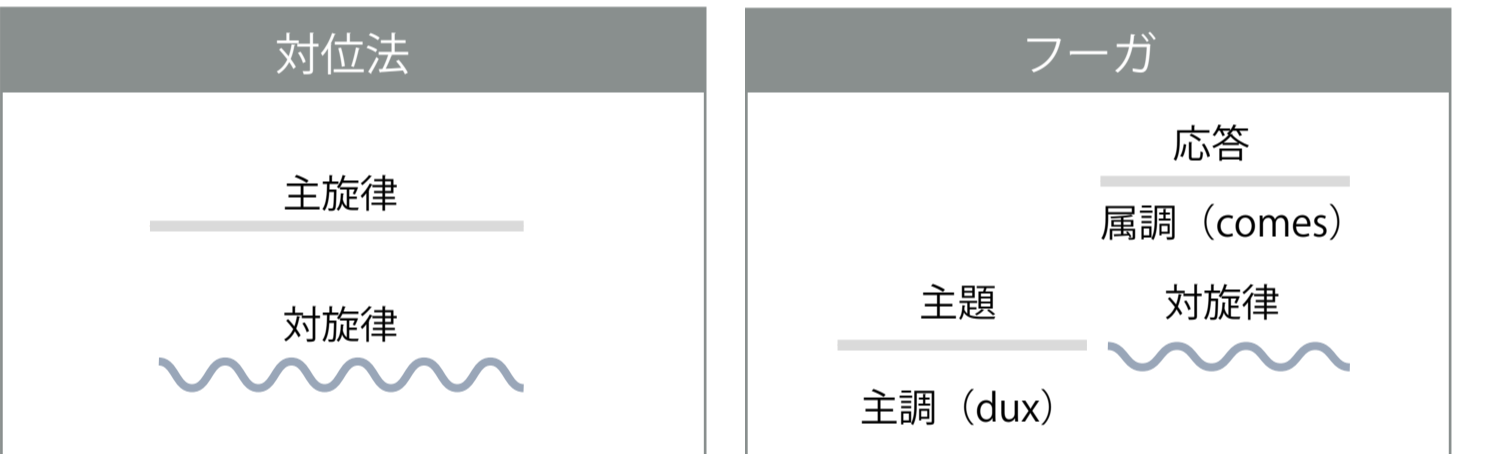
1月2月	3月	4月5月	6月	7月8月	9月10月	11月	12月
スイートピー 自身を スイートピー で飾り付ける	デニム 着デニムは着る会 カーテンや家具に デニムを使う	藤の花 自身を 藤の花 で飾り付ける	倉敷ガラス ガラス製品のショップ 風情ワークショップ で夏の始まりを感じる	桃 清水白桃 農家ごとに 大試食会	マスカット シャインマスカット 農家ごとに 大試食会	倉敷帆布 カーテンや家具に 帆布を使う ハンモックの設置	マスキングテープ ワークショップで 縁起や横に マスキングテープ

INSPIRATION

公共図書館は、一体となれる交流場所が求められる一方で、立場によって異なる多様な居場所が求められている。そこで、対位法の一つであるフーガから着想を得ることで、異なる場所においても呼応し合う関係の築き方について考える。

対位法 / フーガとは

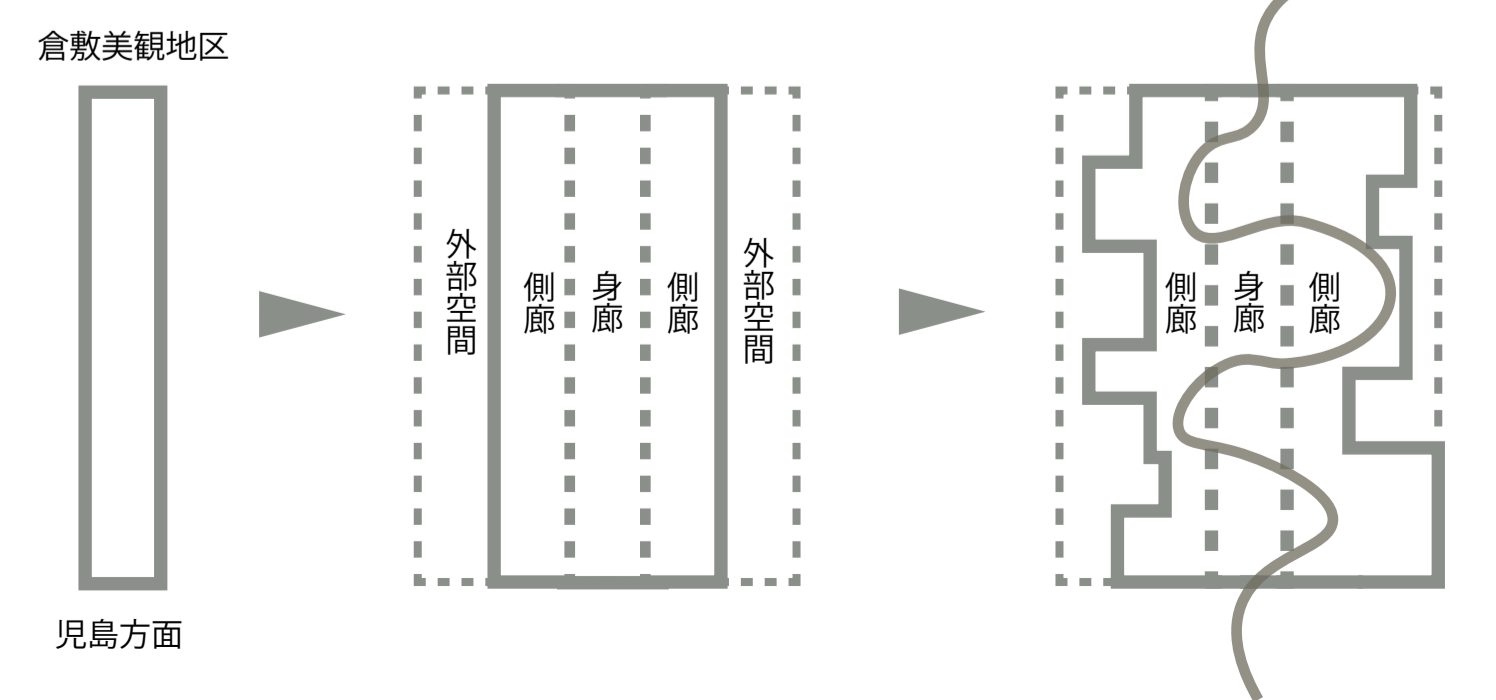
対位法とは、音楽理論の一つであり、独立した複数の旋律を同時に重ね合わせて楽曲を構成する音楽技法である。そしてフーガとは、対位法の中でも、同じ主題をもとに追走するという特徴を持つものであり、主調 (Dux) に対して、5度上もしくは4度下の音から始まる応答である属調 (comes) が続くという規則をもった技法である。この時属調は主題を全く模倣するのではなく、適宜自由に調整しつつ進んでいくという特徴を持ち、対話に例えられる。属調が始まった際に最初に主題を演奏していた声部はまた新たな旋律を奏でるといった規則をもって複数旋律が同時に奏でられる。



今回はバッハ作曲「The Art of Fuga Contrapunctus 1」より着想を得、フーガの理論を建築の形態に落とし込む。この曲は最初に提示される以下の主題が繰り返される単純フーガの曲である。バッハ最晩年まで作曲していた曲で、未完成のまま出版されていること、楽器が指定されておらず、オーケストラなど様々な楽器で演奏されていること、19にもおよぶ曲数で構成されており、様々な形態のフーガをきくことができることといった特徴が挙げられる。特に、楽器が指定されていないという点に注目し、どんな人も許容する懐の広い公共施設とするためにこの曲を参考にした。

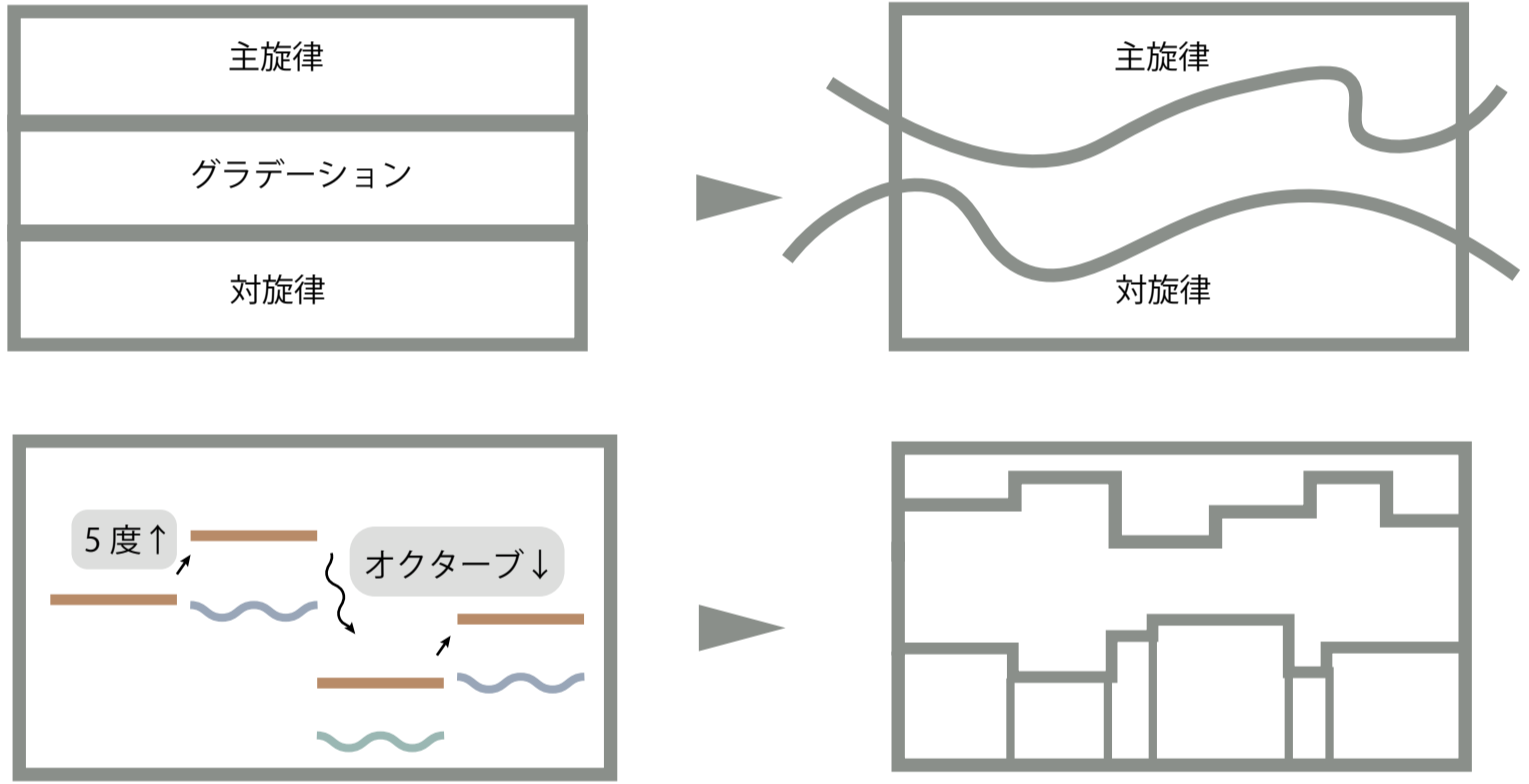
PLANAR DIAGRAM

平面的には、土地のもつ縦に長いという特徴と、市庁舎建設の際に合併された地区である児島方面と倉敷美観地区とを繋ぐというイメージから、南北のラインを作る。設計空間をバシリカと見立て、身廊、側廊、外部空間という五つのレイヤーを作り、周辺環境との調定を図る。さらに、側廊の部分の空間のボリュームに差を付けることにより、身廊と側廊を分断せず有機的につなげて、レイヤーを横断して移動する流れを形成する。



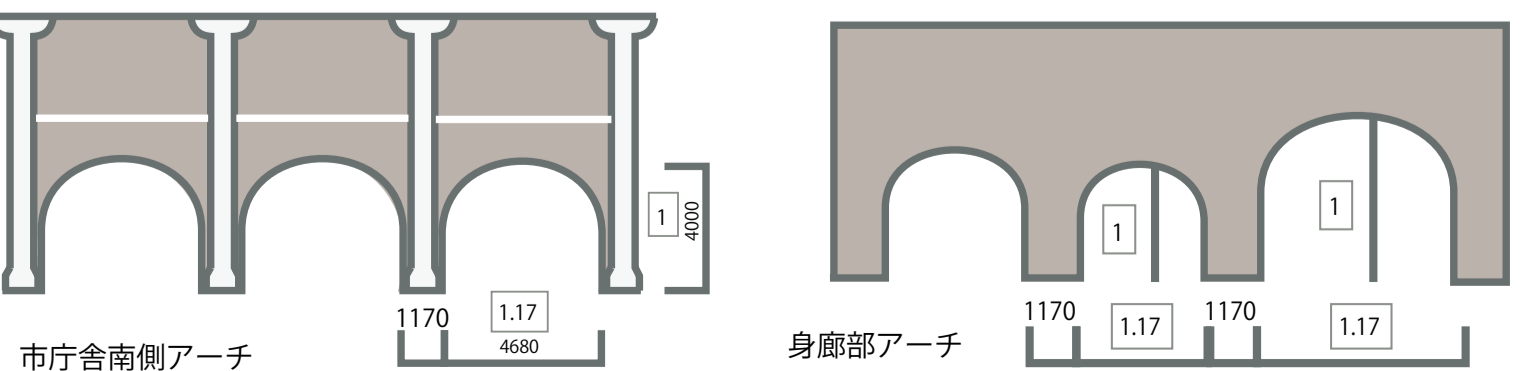
ELEVATION DIAGRAM

立面的には、身廊の部分を高くし、上層部、中層部、下層部という三つのレイヤーを作る。それらを五線譜に見立て、フーガの独立した主旋律と対旋律を持ちながら、呼応し合う様子を形にした。上層部のルーバーは、主題に由来する主調と属調の転調の調の変化を高低差によって表現し、下層部は主題の対唱となる対旋律の転調を表現する。独立した高低差によって、上層部は光に変化を、下層部は空間に変化をもたらしものとする。季節や時間によって変化する光が、粗密の異なるルーバーと高低差によって形を表す。それを下層部にいる私たちは体感し、時の流れを感じる。また、南の東側の壁から始まる旋律の流れは、北の端までたどり着き、さらに西側の壁へと続き南へと帰ってくる。どの入り口から入っても、連続する旋律の流れを感じ取ることが出来る。また、外観は四角いボリュームが連なることによって、市庁舎の厳格な雰囲気を引き継ぐ。



INTERNAL SPACE

内部空間にも立面と同じく独立する旋律をイメージし高低差をつけることにより、見え隠れし、共鳴し合う関係を想定した。配置計画においても規模間の違うコミュニティ形成の居場所を層で分けることにより、利便性向上や安心できる空間の中で上下の繋がりを感じられるようにした。さらに、市庁舎のファサードデザインの特徴であるアーチをアーチを内部空間に取り入れ、公共建築としての統一感を演出するとともに、外観の四角のイメージからのギャップにより内部に引き込む。さらに、市庁舎のアーチ間の間隔 1170mm と、市庁舎のアーチの縦横の比率 1:1.17 を適用し、アーチの形状を統一した。



地域住民は中々自分の町の魅力に
気付かない。観光客だけでなく
地域住民も体験を行い地域の価値を再発見してほしい



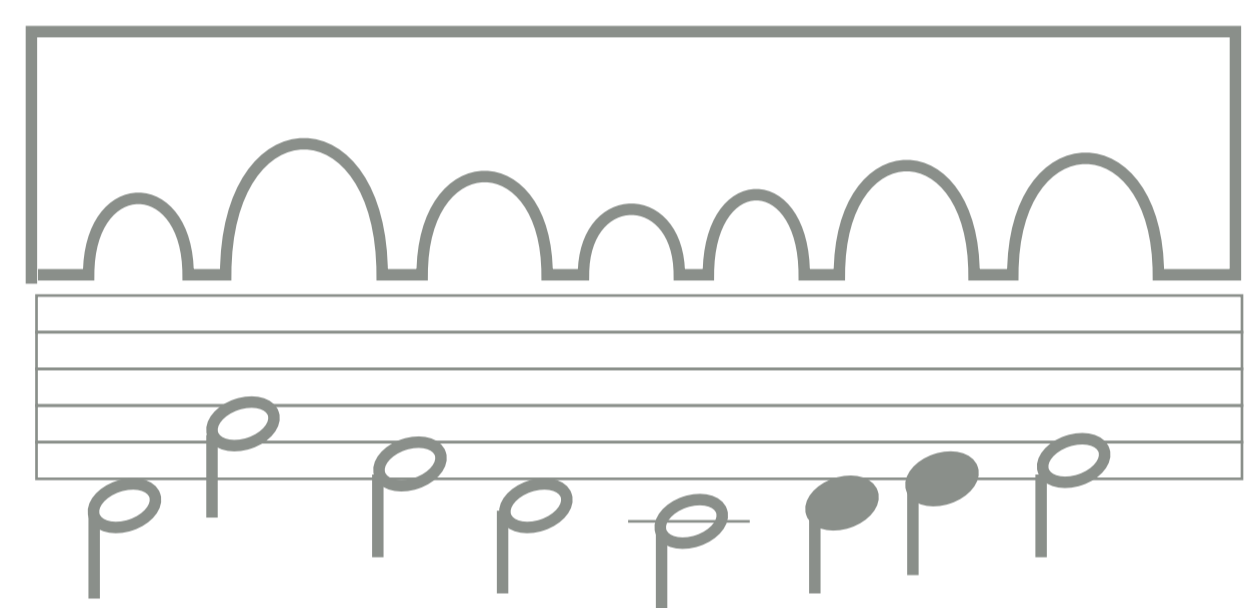
一階平面図 1/150

市民ホール
音楽やイベント、講演会という使いだけでなく、
地域のメディアセンターとして、映画などの
映像作品の上映も行う
地下に配置し、高低差を付けることで
高さとし廊部分からの視界を確保した

二階平面図 1/150 (一部屋根伏せ)

- 16 フロ
- 17 自動書庫
- 18 開架書庫
- 19 読書スペース
- 20 回廊
- 21 交流スペース
- 22 レファレンス・相談コーナー
- 23 外国語学習コーナー
- 24 風除室

フーガはイタリア語で逃走を意味し、次々と追走し移り変わっていく様をあらわす。アーチの高さを音符の位置によって決定し、音程によりアーチにリズムをもたらすことで、前へ前へと進んでいく流れを形成する。さらに、繰り返される主題により、規則的な大小関係が各所に散らばる。大きさは違えど、そのリズムはどこにいても感じることができる。また、二層になった部分に現れる主旋律と対旋律の関係は交差し、互いに関係を生み出す。アーチも立面と同じく、南の東側の壁から始まる旋律の流れは、北の端までたどり着き、さらに西側の壁へと続き南へと帰ってくることで一曲が奏でられる。(右立立面図右側から始まり、左端から右下立立面図右側へと続き、左側に進むことで南へと戻る。)



閉じられた外観と開かれた内観
移動するたびに高さの変わる天井と床
季節や時間によって変化する光
狭い空間の後に突然開かれた中庭や回廊
対比により、変化を体感する。アーチ、高
低差により互いの活動が見え隠れする。場
所の変化と人とのつながりを体感し、ゆる
やかに共有し合うことで多様な関係性を築
き、まちとの関わりを深める。



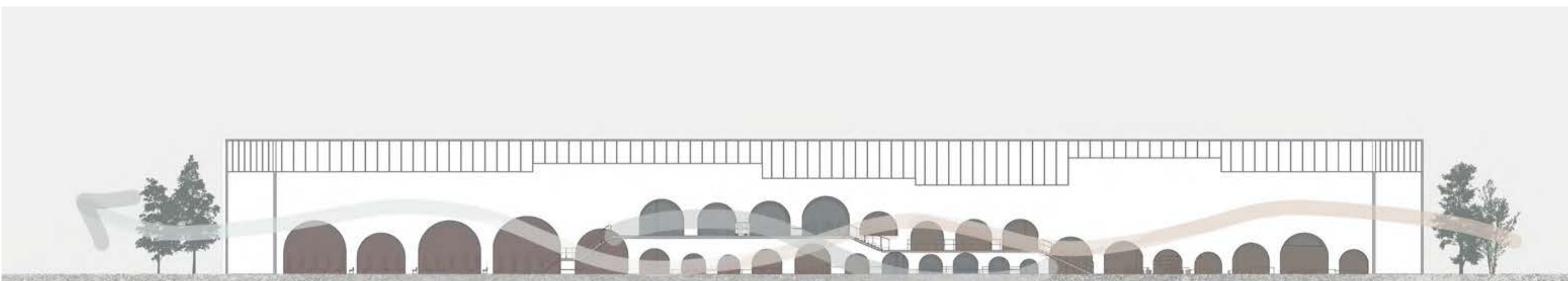
アーチ越しに奥の空間の活動が見える



高低差により互いの活動が見える



中庭と回廊により明るい空間が広がる



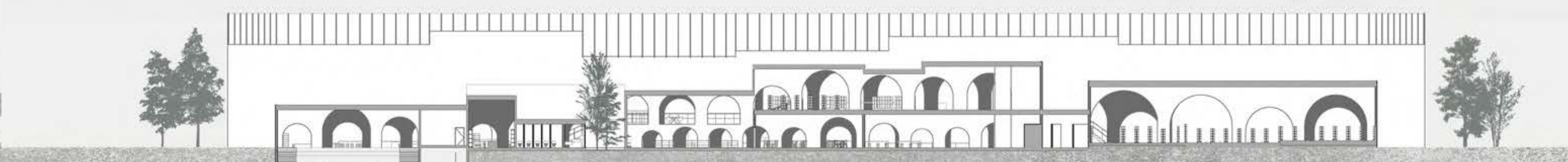
南北断面図 1/300
(身廊から東側を見る)



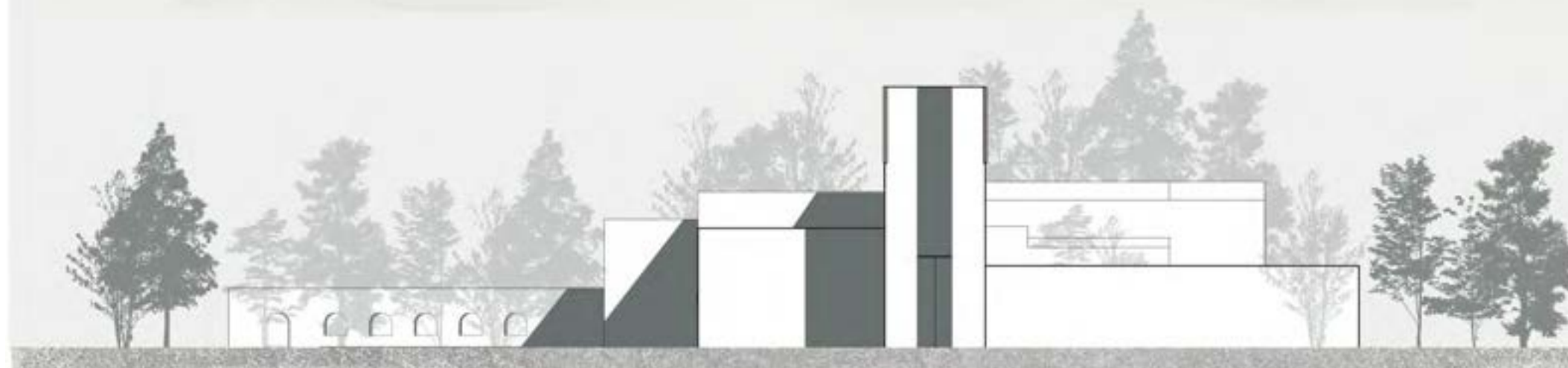
東立面図 1/300
(身廊から西側をみる)



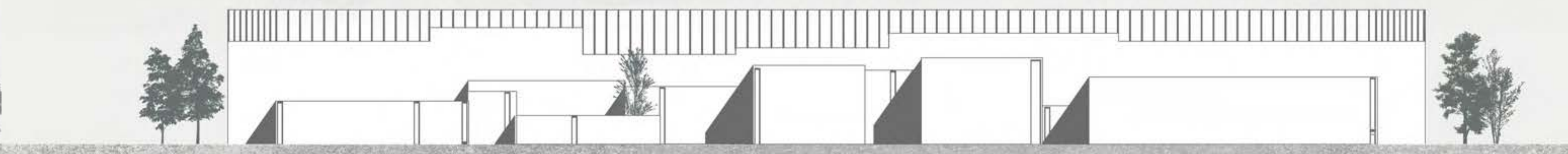
東西断面図 1/300



南北断面図 1/300



南立面図 1/300



東立面図 1/300